

【転載】

博志方丈の「人同じからず」と題する隨筆が、冊子「生きる力」(曹洞宗 神奈川県第二宗務所 第五教区出版委員会・刊)に掲載されました。ここにご紹介いたします。

人同じからず

善光寺 黒田博志

師父大圓和尚が亡くなり、早いもので昨年末には、三回忌を迎え無事尽くすことができました。この二年間唯々刻々夢中に走って参りました。以来、教区のご寺院様、檀信徒のみなさまのお陰で、唯今をつつがなく迎えられていることに、深く深く感謝あるのみでございます。

山内では、この春もまた変わりなく、梅が咲

き、桜が開き、杏も桃も牡丹まで時期を迎え、花々はこぞつてみごとに咲き乱れています。

この季節は殊の外、師父を想い出します。或る時、師父は桜をめでながら、「くる年くる年、花は同じように咲く、しかし人というのは、年ごとに変わって同じではない。同じであつてはいけないのだ。人は歳々進歩発展がなければ、生れた甲斐がないというものだ。博志わかるか」。私は師父の恩愛になれて、大事を大事と思わず、大事を怠っておりました。私はいま求めて苦勞の中にあります。道を学ぼうと志すとき、私の心の中、その道に師父が現われて参ります。私は大いなるものに守られて導かれていることを実感する。『年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず』。師父のことば一つ一つが、いま、わたくしに、かぎりなく力を与え、かぎりなくひかりを与えてくれます。

師父はまた、『人間万事塞翁が馬』という話を

座右の銘としておりました。人の禍福は無常。禍福は変転し、すべてそこに留まっていない。禍の時はじーっと耐え、精進努力していると、必ず福が訪れる。またうまくいったからと浮かれているのは、いつの間にか災難や困難がやってくる。大事なことは、人間盛時には驕らず、衰時には悲しむことがないよう心掛けることであり、唯々常日頃、仏道を深く信じるこそこそが、安心立命への道だと、くり返し申ししております。いまでも耳に聞こえます。

住職という位置に立つても二年位ではいっこうに未熟。若輩が先に立ちます。いまは唯々「三年父の道、改むるなきは孝というべし」。当分父の道のあとを踏みながら、出来ることをやって参りたいと覚悟を新たにいたしております。



在りし日の大圓和尚、家族と共に



夫人と共に